

## 「ガリラヤ湖の嵐」

2014年08月15日

マルコによる福音書4章35節～41節。「その日の夕方になって、イエスは、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり凧になった。イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。』弟子たちは非常に恐れて、『いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』と互いに言った。」

ガリラヤ湖は東西13km、南北21kmの大きさの湖である。ガリラヤ湖の水位は地中海より212mも低く、すり鉢の底に水がたまっているような湖である。そのため、晴れていても、突然嵐が見舞うことがある。風は水平ではなく、上から下に吹き降ろしてくる激しい嵐だそうである。

主イエスと弟子たちを乗せた舟は、ガリラヤ湖特有の嵐に見舞われた。激しい突風によって、波をかぶり、水浸しになった。この時、主イエスは艫の方で枕をして、眠っておられた。嵐の中でも、平安であられたと伝えている。弟子たちは、主イエスを起こし、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。舟が沈みそうなのに、眠っている主イエスに腹を立てたのだろうか。しかし、弟子たちの言葉は明らかにおかしい。岩波訳聖書は「先生、私たちが滅んでしまうというのに平気なのですか」と訳している。弟子たちはガリラヤ湖の漁師で、湖については知り尽くし、何回も嵐に遭遇したことがあっただろう。ナザレの大工であった主イエスに文句を言うより、自分たちで対処するのが当然である。私たちが滅んでも平気なのですかという言葉は、弟子たちが発した言葉ではなく、当時の教会が、神に必死に問いかけた言葉だと思われる。

マルコ福音書が書かれる数年前、ローマ帝国のネロ皇帝によるクリスチャンの大迫害があった。沿道に延々と並んだ十字架にかけて殺され、猛獣に食い殺されるという狂気の迫害を受けた。教会は「主よ、あなたを信じ従っている仲間が無残に殺されている。滅びの惨状をご覧になって、平気なのですか」と真剣に祈った。その教会の祈りを、弟子たちの口に乗せたのではないかと。遠藤周作は『沈黙』という小説を書いている。『沈黙』は、キリシタン迫害に対し、神は沈黙しているというテーマを展開している。人が苦悩に遭遇する時、神は助けてくださらず、黙しておられる、なぜですか」と問いかける。

弟子たち、教会の問いかけに、主イエスは、風を叱り、湖に「黙れ、静まれ」と宣言された。すると、風はやみ、凧になった。弟子たちを「なぜ、怖がるのか、まだ信じないのか」と叱責された。彼らは、風や湖も従わせるこの方はいったいどなたなのかと驚いた。

舟は教会であり、嵐は私たちが遭遇する苦難であると受け止めて、よい。苦難に遭った時、人は苦難の大きさばかりに目を奪われ、浮足立つ。しかし、教会は、嵐を制する主イエスが同舟しておられる。嵐を治め、苦難を乗り越えられるように伴ってくださる。あなたは、共におられる主イエスを信じ、この方から目を離すな。このメッセージを喜ぶたい。